パーカッションコンサートP

2023年 2月20日（月） 18:30 開演
（18:00 開場）

洗足学園 前田ホール

主催：洗足学園音楽大学・大学院

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。

・大声や対面での会話はお控えください。

・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。

・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。

・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。

・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。

・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

ご挨拶

本日は「パーカッションコンサートP」にご来場いただき誠にありがとうございます。

打楽器の基本的な奏法や構造を学び、打楽器奏者としての基盤を作る授業、学生たちは打楽器コースが誇る指導陣と共に練習を重ねてまいりました。

今回のプログラムは、西洋音楽史上初めての打楽器のみによる作品「イオニザシオン」、打楽器アンサンブルの古典として知られる「サード・コンストラクション」、バスクラリネットと打楽器の為の「マラカイトグラス」他にも多彩な作品が並びます。
また、今回はじめて“ダンスコース”とのコラボレーションも実現いたしました。コースの垣根を超えたパフォーマンスにもご注目下さい。

アンサンブルとは人間関係を学ぶ場でもあります。そこには互いに認め合い、励まし合い、努力する、それぞれの思いを乗り越えてまとまっていく素晴らしさがあります。
この授業を通じて創造し、表現する力が育まれていることを指導教員一同心より願っております。
最後になりますが、演奏会を開催するにあたりご尽力賜りました関係各位に心よりの感謝を申し上げます。

打楽器アンサンブル　企画運営責任者
打楽器コース統括教授
石井喜久子

プログラム

池辺晋一郎 ： テンテンイダテン

E.D.ノヴォトニー ： クロス

野本洋介 ： 断章

共演 ： ダンスコース

指揮 ： 野本洋介

~休憩~

ジョンケージ ： サードコンストラクション

N.ウエストレイク ： マラカイトグラス

トビアス・ブロストレム ： ノルディックピース

~休憩~

E.ヴァレーズ ： イオニザシオン

指揮:野本洋介

P.グレインジャー編 ： ダニーボーイ

指揮:野本洋介

プログラムノート

池辺晋一郎：テンテンイダテン 10人の打楽器奏者のために

Shin-ichiro Ikebe：TEN・IDATEN for ten percussion players

この曲は、パーカッション・ミュージアムの委嘱により1999年に作曲され、同年6月17日カザルスホールで初演された。欧文表記はTEN・IDATENだが、IDATENは韋駄天と書き仏法守護神の一人を表していると作曲者のコメントが残っている。
この曲のテーマであるTEN・IDATEN（テンテンイダテン）の発音、イントネーションをそのままリズム形の核としている。それを伴奏にしてソリスティックなメロディーが連なっていくことがこの曲の魅力である。また、カウベルやアゴゴベルと言った金物の打楽器を用いることで音色面でも曲に立体感をもたらしている。（学4　榎本 耀）

天谷 芽生(学4)　榎本 耀(学4)　古橋 優実(学4)　大野 紗楽(学3)　小山 梓(学3)　廣木 太陽(学3)
渡辺 優生(学3)　鎌田 千尋(学2)　林 まど子(学2)　佐竹 光輝(学1)

E.D.ノヴォトニー：クロス　☆学部1年生のみによる演奏

Eugene D. Novotney : CROSS

E.D.ノヴォトニーは　1960　年にアメリカで生まれ、若い頃からジャズやクラシック、民族音楽など様々なジャンルの音楽を経験。パーカッション奏者兼作曲者として世界的に活躍。この Cross でもラテン音楽のクラーベというテンポを構成するリズムパターンを多く用いている。
この曲は奏者の任意で楽器や人数などの構成を変えて演奏して良いとされており、本日の演出や構成は全て1年生のオリジナルとなっている。
私たちは今回、普段から演奏しているスネアや私生活に使用している道具、体などの様々な「打楽器」に着目し作り上げた。
1 年生らしい力強いフレッシュな演奏を是非最後まで楽しんでいただきたい。（学1　畑津 圭吾）

井川 のの　宇佐美 裕大　海野 結衣　榎本 若葉　老沼 咲桜　落合 侑亮　加藤 龍雅　阪本 真唯
櫻井 優凪　佐々木 和奏　佐竹 光輝　島﨑 蓮　高田 勇大　田中 翔乃　中本 亜美　畑津 圭吾
林 恭輔　原 佑安　福島 潤　両倉 愛斗　LIANG CHEN　吉田 歩登　吉田 葉音

野本洋介：断章～打楽器アンサンブルのための　☆ダンスコースコラボ

Yosuke Nomoto：DANSHO Movements for Percussion Ensemble

この曲は、フォッシオー主催「魅惑の室内楽Vol.5　～ダンスにまつわる音楽を集めて～」平野裕樹子（ピアノ）、ジュリアーノ・アドルノ（ピアノ）、野本洋介（打楽器）で2019年に初演された2台ピアノと打楽器のための作品を、今回の演奏会のために打楽器八重奏に編曲したものです。
ピアノ部分はマリンバを中心にヴィブラフォン、グロッケン、チャイム、アンティークシンバル、ティンパニに置き換えました。
初演時は膜質類のフロアトム・小太鼓・ボンゴ、金属類のライドシンバル・スプラッシュシンバル・カウベル・トライアングル、木質類の木魚・ウッドブロック・マラカス・クラベスの計12音を打楽器奏者1人で担当しましたが、編曲するにあたりさらに大太鼓、タンバリン、コンガ、銅鑼、吊るし・合わせシンバル、ハイハットシンバル、ウインドチャイム、ムチ、ラチェットを追加し、音色だけでなく音域の補充・拡張を意識しています。
曲はゆったりとした妖しげな序奏、決然とリズムを打ち込む中間部、熱狂的に駆け抜ける終結部から出来ています。アジア（農耕民族）的なものと西洋（騎馬民族）的なものを混ぜることを意識したリズムと、象徴的な長2度下降の動き、その長2度から派生するトーンクラスターの響きを基本としています。
「ダンス」をテーマに書いた曲が、今回ダンスコースとのコラボレーションで取り上げられるということでとても興味深く、どのような相乗効果になるか楽しみです。（野本 洋介）

渡辺 優生(学3)　鎌田 千尋(学2)　林 まど子(学2)　宇佐美 裕大(学1)　加藤 龍雅(学1)　阪本 真唯(学1)
畑津 圭吾(学1)　福島 潤(学1)
◉ダンスコース
小佐野 葉菜(学3)　大石 琴愛(学2)　細山 麗(学2)　石河 心遥(学1)　木原 こずえ(学1)　永倉アクア愛(学1)
プライス実唄(学1)　森崎 結香(学1)　渡邉 百々香(学1)

J・ケージ ： サードコンストラクション

John Cage：Third Construction

打楽器アンサンブルの古典として有名である、ジョン・ケージが作曲したこの曲。ケージ作品の中でも初期の作品であり、3曲の「コンストラクション」の最後の1曲にあたる。既に楽器としての地位を確立しているトムやクラベスなどが登場するが、注目すべきは、空き缶やライオンの咆哮、法螺貝などである。そもそも本来楽器として扱われてないものや、地域も年代も異なった楽器たちが混ざり合うことで、クラシックパーカッションでは味わうことのできない、非西洋的で不思議な響きを感じ取ることができる。そして、それらの多様な打楽器たちがシンプルな拍子の中で躍動的なリズムを発し、絡み合う。
珍しい響きだが、不思議と聴きやすい、ジョン・ケージの独特な世界観をお楽しみいただきたい。　（学3　小山 梓）

小山 梓(学3)　渡邉 拓斗(学3)　浅井 惇(学2)　佐々木 和奏(学1)

N.ウエストレイク ： マラカイトグラス

Nigel Westlake：Malachite glass

N.ウエストレイクはオーストラリアのクラリネット奏者であり、作曲家でもある。彼はクラリネットを父親から学び、その後バレエ団やオーケストラと共に世界中で演奏活動を行った。また彼の作曲活動は多岐に渡り、クラシックだけでなくジャズや映画音楽など数多くのジャンルを手掛けている。
このmalachite　glassという曲は4人の打楽器奏者と1人のバスクラリネット奏者によって演奏される。バスクラリネットはリズムに特化した旋律を奏でており、時にマリンバと同じ旋律を奏で、時に掛け合いを行って曲全体をリードしていく。またマリンバもメロディックなリズムとリズミカルな旋律の二種類を奏でることで、曲全体を飾り付けていく。一方、打楽器は木や金属などの様々な素材の楽器を使用することで、現代的な響きを作り出して曲を変化させていく。このように全員が互いに呼応し作り上げていくところがこの曲の魅力であり聞き所である。　（学4　古橋 優実）

榎本 耀(学4)　古橋 優実(学4)　渡辺 歩紀(学2)　高田 勇大(学1)

◉バスクラリネット
平野 佳太(演奏補助要員)

T.ブロストレム ： ノルディックピース

Tobias Broström：NORDIC PEACE

Tobias Broström（トビアス・ブロストレム）はスウェーデン出身の作曲家である。
マルメー音楽大学で4年間打楽器を学んだ後、スウェーデンの作曲家ロルフ・マルティンソンとイタリアの現代音楽の作曲家ルカ・フランチェスコーニに師事する。
今回演奏するNORDIC　PEACEは一定のパターン演奏を繰り返す中でパターンの最後、もしくは楽曲の繋ぎ目の1～2小節で即興的な演奏を入れ、変化をつけるドラムセットのフィルインという奏法からアイデアを得たアンサンブル曲である。
奏者の1人はタムの付いていないドラムセットを使い、他の奏者がタムやボンゴ、ティンバレスなどを使い一つのドラムセットでフィルインを演奏しているような場面が多々出てくる。
冒頭の6連符の中で動く4分音符や8分音符と2拍3連音符、中盤に突如出てくる強烈なフィルインを連想させるユニゾン。
終盤の全奏者で一つのドラムセットを演奏しているようなアンサンブルをぜひ楽しんでいただきたい。
（学4　前田 歩都）

天谷 芽生(学4)　前田 歩都(学4)　小山 梓(学3)　渡邉 拓斗(学3)

E.ヴァレーズ：イオニザシオン

Edgard Varèse：IONISATION

「IONISATION」は、単独の西洋音楽作品としては最も古い打楽器アンサンブルの曲である。
作曲者のヴァレーズは、旋律、和声、形式などの伝統的と思われるもの一切を用いずに、 音の色彩、強弱、リズムの性質を中心に追求し、打楽器だけで音楽が成り立つことを提示した。
またこの曲は、13人の奏者と37もの打楽器を使用する。バスドラム、銅鑼、シンバルの深い厳かな響きから曲がはじまったあと、この曲の特徴的な音色とも言えるサイレンが加わる。わずか91小節からなるこの曲の中で、どのように37もの打楽器の響きが混ざり合っていくのか、その響きと変化を楽しみながら聴いていただきたい。

（学4　天谷 芽生）

天谷 芽生(学4)　櫻井 秀悠(学4)　前田 歩都(学4)　大野 紗楽(学3)　浅井 惇(学2)　李 泰我(学2)
海野 結衣(学1)　落合 侑亮(学1)　櫻井 優凪(学1)　田中 翔乃(学1)　吉田 歩登(学1)　両倉 愛斗(学1)
LIANG CHEN(学1)

P.A.グレインジャー（Arr.野本 洋介）：ダニーボーイ

Percy Aldridge Grainger（Arr.Yosuke Nomoto）：Danny Boy

《ダニーボーイ（Danny Boy）》は、アイルランドに伝わる民謡「ロンドンデリーの歌（Londonderry Air）」のメロディーに歌詞を添えた楽曲だ。
作詞は、イングランドの弁護士 "フレデリック・ウェザリー（1848-1929 / 英）" が手がけた。元々は別の楽曲のために1910年に作られた詞だが、渡米していた義妹から「ロンドンデリーの歌」の楽譜が送られてきたことで、その詞をメロディーに合うように修正し、第一次世界大戦の前年である1913年に発表されたのだ。
この歌詞では、出兵する愛する子供を想う母親や父親の切ない心境が描写されている。歌詞冒頭には「Oh Danny boy, the pipes, the pipes are calling...」とある。この歌詞に出てくる "the pipes" はバグパイプを表し、兵の召集を意味している。
今回はアレンジャーでも名高い「パーシー・オルドリッジ・グレインジャー（1882-1961 / 豪）」の弦楽合奏版に、本学打楽器コース講師の野本洋介氏がアレンジを加えた "マリンバアンサンブル" でお届けする。
今も尚拡大し続け世界をも動かす新型コロナウィルス感染症やウクライナ情勢では、沢山の命が奪われ "命の大切さ" を改めて痛感した方が多いだろう…。
我々奏者にできることは音を奏でること。言葉にすることは簡単だが、世界の "平和" や、人々への "愛" を音楽を通して伝えたい。

（学4　櫻井 秀悠）

櫻井 秀悠(学4)　廣木 太陽(学3)　渡辺 歩紀(学2)　李 泰我(学2)　井川 のの(学1)　榎本 若葉(学1)
老沼 咲桜(学1)　島﨑 蓮(学1)　中本 亜美(学1)　林 恭輔(学1)　原 佑安(学1)　吉田 葉音(学1)

企画運営責任者	石井 喜久子
指導教員	石井 喜久子　井手上 達　野本 洋介　古川 玄一郎　村瀬 秀美
ダンスコース指導教員	井口 美穂
照明	岡田 勇輔
合奏授業助手	北川 乃梨子